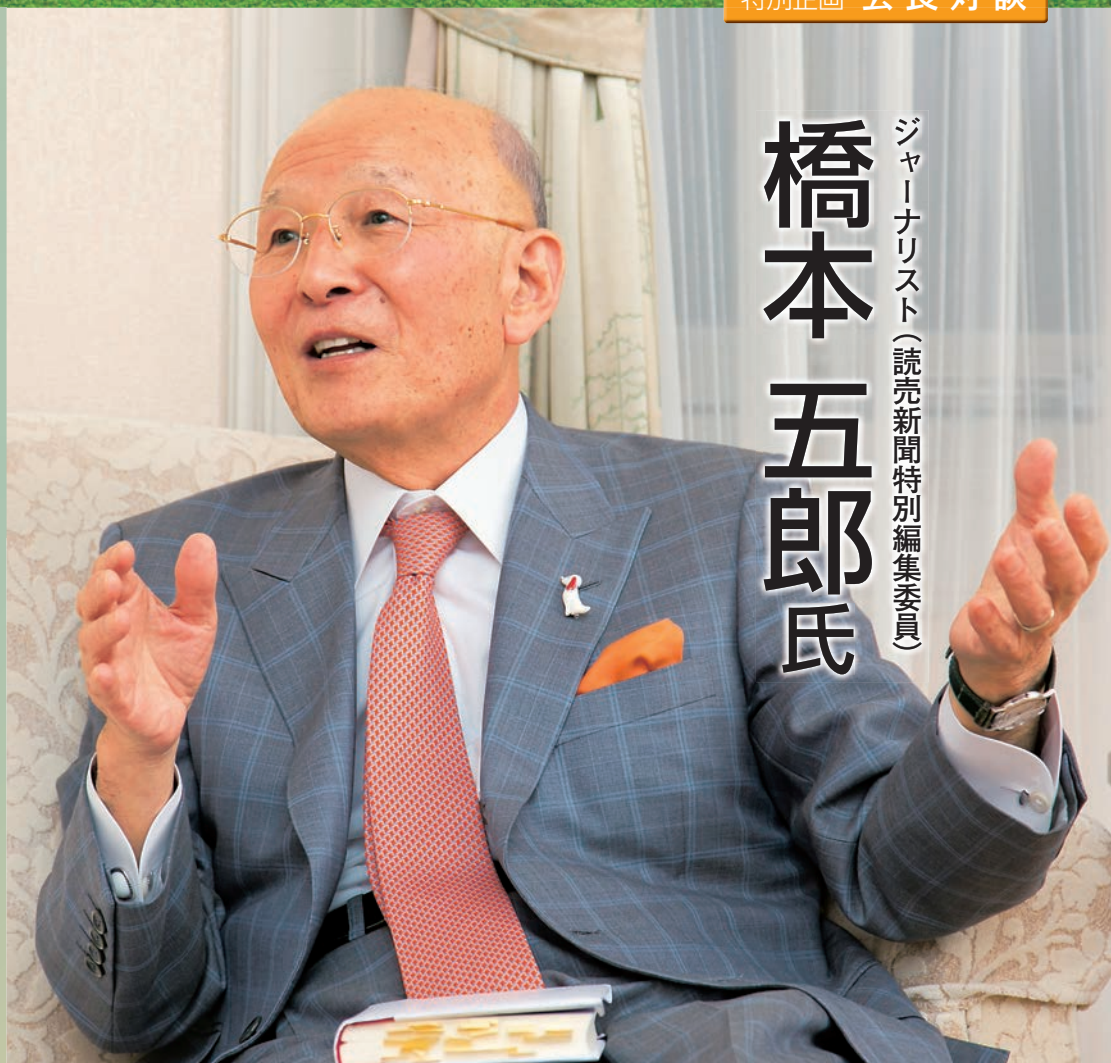


ジャーナリスト（読売新聞特別編集委員）

橋本五郎氏



物事を謙虚に、大局的に捉えて 世のなかの“なぜ”に答え続ける

■プロフィール はしもと・ごろう

1946年秋田県生まれ。70年慶應義塾大学法学部政治学科卒業後、読売新聞社に入社。論説委員、政治部長、編集局次長を歴任し、2006年より現職。読売新聞で「五郎ワールド」を連載し、書評委員も20年以上にわたって担当している。また、日本テレビ「スッキリ」、読売テレビ「ウェークアップ! ぶらす」「情報ライブ ミヤネ屋」にレギュラー出演。2014年度「日本記者クラブ賞」受賞。著書は、『官房長官と幹事長』（青春出版社）、『一人、二人、三人一心に響く51の言葉』（中央公論新社）、『範は歴史にあり』『二回半 読む』『宿命に生き 運命に挑む』『虚心に読む』（藤原書店）、『総理の器量』『総理の覚悟』（中公新書ラクレ）、『新聞の力 新聞で世界が見える』（労働調査会）など多数。

秋田での経験と出会いが 人生の“導き”となる

進藤 今回は読売新聞のコラム「五郎ワールド」や数々の書評、テレビの報道番組への出演など、幅広く活躍されているジャーナリストの橋本五郎さんにご登場いただきました。橋本さんと私は同じ秋田県で生まれ育ち、県立秋田高校の同窓生で、日ごろから親近感を持って著作などを拝読していました。本日は橋本さんがジャーナリストを志されたきっかけや、記者としてのこだわり、日本の政治と今後の世界情勢など幅広くお話を伺いたいと思っています。まず初めに、秋田県ではどのような少年時代を過ごされましたか。

橋本 八郎潟湖畔の田んぼが広がる田舎の町で生まれ育ちました。女1人、男5人の6人兄弟の末っ子で、10歳も歳が離れた長兄は父親のような存在でした。家族で囲炉裏を囲んで食事をとり、夕食後は東大受験を控えて勉強する兄の膝の中に入ったまま眠ってしまふ。そんな暮らしでした。何よりも自然のなかで少年時代を過ごせたのが、かけがえのない思い出です。

進藤 スポーツは何かされたのですか。

橋本 稲刈りが終わって乾燥した田んぼでよく野球をしました。小中学校は野球部に入り、高校でも硬式野球部に入部しましたが、自宅から秋田高校まで汽車、徒歩を含めて2時間かかる。練習後は毎日終電で帰宅する生活で勉強もままならず、無理を感じて退部しました。

進藤 秋田高校の鈴木健次郎校長は、大変素晴らしい教育家でしたが、何か印象に残っていることはありますか。

橋本 一番感動したのは、2年生のとき校長として赴任された鈴木先生の「『汝、何のためにそこにありや』と、いつ、どんなとき、誰にこの問いを発せられても、即座に断言で

長年の政治記者経験を通じて、「ジャーナリストはいかにあるべきか」を常に自らに問いかけ、世のなかにある「なぜ」に答え続けてきた橋本五郎氏。歴史を振り返り、世界の古典や著作を豊かに引用した筆致が読者の共感を呼んでいます。また、テレビ・ラジオ番組のレギュラー出演も多く、確かなコメントで物事の本質を突き、視聴者の理解を深めています。今回の会長対談は橋本氏をお迎えし、生まれ育った秋田県と学生時代の思い出や、ジャーナリストとしてのこだわり、今後の日本・産業界の進むべき方向など、幅広くお話を伺いました。

日本製鉄(株) 代表取締役会長

進藤 孝生



自然豊かな環境で野球に熱中した少年時代(左は三兄弟と)



秋田高校の鈴木健次郎校長(当時)



きる自覚ある生活を送ってもらいたい」という訓話です。その場で聞いた1500人の生徒は水を打ったように静かに聞き入り、深く感動したことを鮮明に覚えています。私自身この言葉が、終生忘れることのない導きになっています。

進藤 私も在学中、あの言葉に感動しましたね。大きく捉える「何のために生きているのか」であり、「今やっていることは何のためにやっているのか」という、一挙手一投足を問われている。大変感銘を受けましたね。

また、地元秋田への思いの表れとして、2011年4月、生徒数が少なく統合・廃校になった母校の小学校舎に「橋本五郎文庫」を開館され、蔵書2万冊を寄付されました。開館の経緯や思いをお聞かせいただけますか。

橋本 母校が125年の歴史に幕を閉じることになり、なんとか校舎は残したいという思いから図書館を思いつきました。当時持っていた2万冊をトラック輸送し、本棚を60〜70個送って開館しましたが、農家の主婦を中心に地域の人たちがボランティアで、掃除から本の整理、ラベル貼りなどを手伝ってくれました。善意に心を打たれましたね。実にいろいろな方の協力を得られた結果、皆さんが自分たちの図書館だと思ってくれているのが一番うれ

しいです。看板は私が最も尊敬する政治家、故・中曽根康弘さんに揮毫してもらいました。

進藤 人口約500人の地域で、オープン時には750人以上の人が来館されたそうですね。その後も、震災で大変な被害を受けた岩手県大槌町の子どもたちが修学旅行で訪れたり、多くの人が訪れる地域の重要な文化施設になっていますね。

橋本 今年4月に開館10周年を迎えますが、周年記念日には毎年、大学の学長や政治家、ニュースキャスターなど著名な方も含めて全国から多くの来館者があり、蔵書も4万5000冊まで増えました。

世界を駆け巡る記者に憧れ ジャーナリストを目指す

進藤 秋田高校卒業後は慶應義塾大学に進学されました。著作では福澤諭吉の話も書かれています。どのような大学時代でしたか。

橋本 高校時代にできなかった野球を、軟式サークルで4年間続けました。勉強では福澤諭吉先生についての著作も含めいろいろ読みましたが、大学がある日吉周辺には古本屋が3軒しかないので、古本屋が並ぶ早稲田まで遠征して、すべての店を回って最も安い店で買っていました。苦勞して手に入れた本なので、1冊1冊が愛おしかったですね。そういう意味で、私の大学時代は「野球」と「古本屋」です。あと、周りの学生たちを見ると、勉強をあまりしなくても社会で立派なリーダーになる人がいる。私自身、そういう人たちを見て、勉強では知り得ない大切なことも学びました。

進藤 ジャーナリストを志したきっかけ、動機は何だったのですか。

橋本 興味を持つきっかけは、1961年のジョン・F・ケネディ大統領の登場です。70歳のドワイト・D・アイゼ

ンハワーから43歳のケネディへの政権交代は、松明が若い世代に引き継がれた感覚があつて、ものすごく新鮮でした。「国があなたに何をなし得るか問うな、あなたが国に何がなし得るか問え」と述べた就任演説を聞いて、40代の若い政治家がそう言えるアメリカという国はすごいと思いました。

その興味から、就任後間もなく実現した米ソ首脳会談（ウィーン会談）を取材したニューヨークタイムズのジェームス・レストン（のちに同紙副社長）の記事を読んで、「記者つてすごいな」と思いました。その後、ベトナム戦争が激しくなった時代、世界を駆け巡ってベトナムの和平について知識人にインタビューするジャーナリストたちが輝いているのを見て、「新聞記者になろう!」と。ただ、長兄からは「火事が起きたら走りながら現場をいち早く確認するのが新聞記者で、立ち止まって探すタイプのお前には向かない」と言われましたが（笑）。

進藤 大学卒業後は読売新聞社に入社されました。数ある新聞社のなかで同社を選ばれた理由はあるのですか。また新人時代はいかがでしたか。

橋本 野球が好きでしたから、理由は何といっても読売ジャイアンツです（笑）。私は政治部志望でしたが、新入社員は5年間地方であらゆる取材をして修行し、政治部や経済部などの記者になれるのは6年目ぐらいからです。

進藤 新人として多様な取材をこなすのは大変だったと思いますが、そのなかで心がけていらつしやったことはありますか。

橋本 私が社会人になるときに、母から「何事にも全力で当たれ」「傲慢にならず常に謙虚であれ」「どんな人も優れたところがある。人を嫌いになるな」と言われ、母に恥ずかしいと思われる人生を送ってはならないと心に誓っていました。地方記者として、今日よりも明日、明日よりも明後日、確実に成長する人間になろうと本気で思いましたね。



3つの原則に基づき 世のなかの「なぜ」に答える

進藤 橋本さんは、ジャーナリストとしていかにあるべきかを自らに問い続けながら、真摯に仕事と向き合うなかで、「健全な相対主義」「適度の懐疑論」「鳥の目と虫の目を持つ」という、自らに課した3つの「原則」があると言われています。そこに込めた思いを教えてくださいませんか。

橋本 新聞記者は自分のことを棚に上げて、わずか数日の取材で人を評価する。こんな傲慢な職業はないと思います。傲慢にならないためには、冷静さと大局観を持って「相対的」に事実を見極める。また、時間と競争しながら事実を挑み論評を加える宿命において、正義や怒りを振りかざす前に、過信せず、自分が間違っているのではないかと常に「懐疑心」を持つことも大切です。

「鳥の目と虫の目」は、言動や出来事だけでなく、社会的な構造変化などの背景まで考える。歴史軸・空間軸、そして世界の同時連関性が高まっている今日の状況まで含めて時代を見る。鳥瞰図的な目と、人間一人ひとりの喜びや悲しみと寄り添い、大切にすると「虫の目」の両方で見なければいけないと考えています。

進藤 その3要素は、時代の流れをどう認識し、どういう方向へ会社を持つていくのか、そのためには具体的に何を、どういう製品をつくり供給するのかということを考えていかなければならない、私たち鉄鋼メーカーの社員にとっても大切な視点だと本当に思いますね。

橋本さんは、世のなかの「なぜ」に答え続けるのがジャーナリストの使命とするなかで、事実を正確に報道し、その意味を解説し、どうすべきかの処方箋を示し続けてこられました。特に政治記者として大切にされてきたことはありますか。

橋本 この物事はなぜこうなったのか、なぜ決まったのかな

ど、世のなかの疑問に答えるのが政治記者の仕事であり、その一部として権力批判が出るときもありますが、なぜに答える前提として、政治家や経営者など取材対象との信頼関係が不可欠です。そのために必死に勉強し、己を鍛え続けなければなりません。「傲慢になるな、謙虚であれ」と言いましたが、人を批判するからには、日々勉強してその人の経験を追体験するぐらいの気持ちでやる。そうしなければ読者への責任が果たせない、後輩にも強く言っています。

わかりやすく伝える大切さを 再確認したテレビ出演

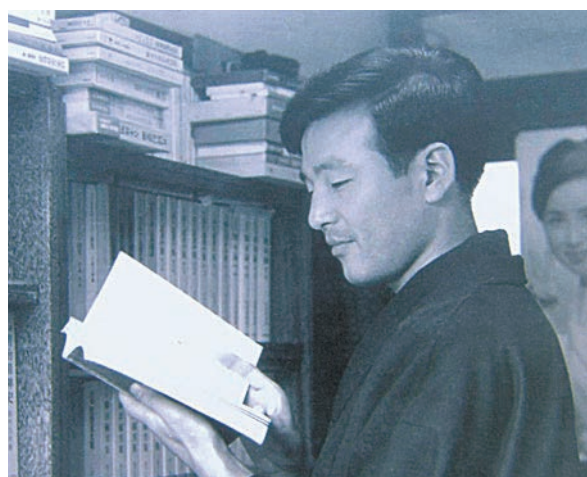
進藤 編集局次長に就任された翌年の1999年から、朝の情報番組や報道番組にも数多く出演されるようになりました。きっかけがあったのですか。

橋本 読売新聞グループの渡邊恒雄主筆からの「テレビをやってくれないか」のひとことです。私は、「テレビに出る人は顔が良くてはならない」「部数でライバル紙を抜いた今、読売新聞のイメージ向上にさらに努力したい」という2つの理由で断りましたが、「中村慶ちゃん（元・読売新聞記者の故・中村慶一郎氏）でもできた」、2つ目は「俺が毎日イメージ向上を考えている」、とどめは「君を説得していて血圧が130から190に上がった」と言われ、受けざるを得なくなりました（笑）。

進藤 新聞とテレビでは、報道手法も異なると思いますが、ご苦労されたことはありますか。またご自身のなかで何らかの変化はありましたか。

橋本 最初は大変でした。毎回3つぐらい自分で話すコラムを考えますが、覚えきれないし、オンエア時に話の順序が1、2、3から1、3、2に変わったり、いろいろありましたね。でも、ものすごく勉強になりました。また、喋っているだけではダメで、どんなことでも相手に伝わらなければ

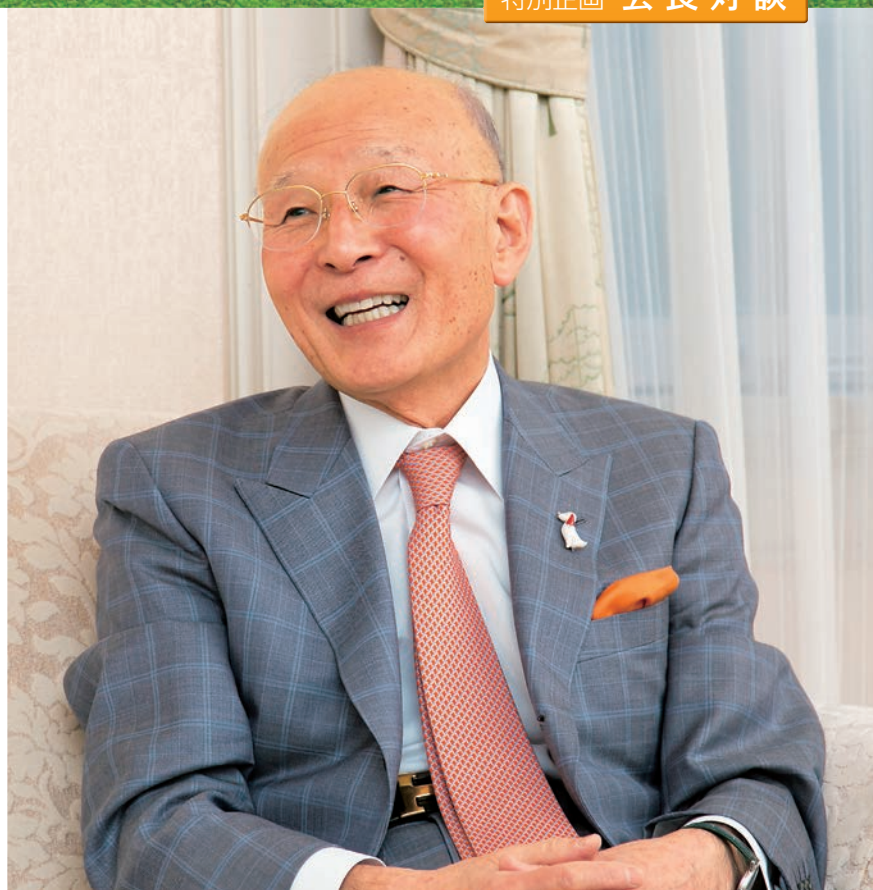
「橋本五郎文庫」の図書室と、故・中曽根康弘氏に揮毫いただいた書



慶應義塾大学法学部在学時代



読売新聞社政治部配属後（写真左が橋本氏）



ば意味がない。子どもからお年寄りまで幅広い世代に向けて、わかりやすい的確に伝えなければなりません。とても新鮮な経験でした。心がけていることは、自分の考えを含め多様な意見があるなかで、一方に偏らないようにする。まさに「健全な相対主義」を大切にしています。あとは、その場にはいない人を批判しない。人を批判するときは必ずその人を前にして言うことを原則にしています。

作品が私たちに与える感動を伝える「書評」

進藤 橋本さんの著書を拝読すると、本当に多くの本を読み込まれて、深い理解に立って人物紹介を書かれているのを感じます。著書のなかで大蔵官僚から国税庁長官を経て

博報堂社長になられた近藤道生さんの立派な人物像や、評論家・文筆家である木原武一さんの哲学的なメッセージなど、私自身、感銘を受ける人物が数多く紹介されています。橋本さんご自身が特に興味を持たれた人物は誰ですか。

橋本 近藤道生さんは大変な教養人だと思いますが、私は基本的に、お金や社会的地位の有る無しで人を区別して見ません。浜松支局時代に取材した浜名湖の漁師さんが、夕方、浜名湖のほとりですと水面や空を見つめて、死活問題でもある翌日の天気を当てる。それを後ろから見ていると日焼けした姿が神々しいまでなんです。この人にはかなわないと感じましたし、こういう人にこそ学ばべきだと思います。

進藤 橋本さんは20年以上、読売新聞の書評委員をされています。著書の『「二回半」読む』『虚心に読む』などを拝読しても、橋本さんの書評は、その本に対して愛情を持って深く読み込んだ上で書かれていることがわかります。どのようにして書き上げるのか、具体的に教えていただけますか。

橋本 本のなかに「人間」を見つけること、つまり作者が何を言おうとしていて、それが私たちに与える感動を伝えるのが書評だと考えています。最初は、作者が何を言おうとしているかを虚心に読み取り、心に響いた部分に赤線を引き、2回目は紙に抜き書きして感想を書きながら読む。1冊で紙が30枚以上になることもあり、この過程に最も時間を費やします。最後は、本を離れて自分が書いた紙を読んで、それから書評を書き始めます。書評を出したあと、著者から、「研究内容を知らなかった家族が、書評を読んで理解してくれた」「私が考えている以上のことを書いてくれた」などとお手紙をいただくことが本当にうれしいですね。

テレビ番組でコメンテーターを務める橋本氏



日本テレビ「スッキリ」より

書評を書くのは読者への責任もあり大変な仕事ですが、そうした楽しみがあるのでまったく苦になりません。

コロナ禍で暮れた2020年。 未知の経験から学ぶ

進藤 昨年は新型コロナウイルスの感染拡大が長期化し、2021年も引き続き、感染防止と経済活動の両立という難題に立ち向かわなければなりません。橋本さんは、日本の社会制度や国民のあり方という点で現状をどのように評価されていますか。

橋本 日本には、すべての国民が公的医療保険に加入し、お互いの医療費を支え合う「国民皆保険制度」があります。これは人間の命の値段は皆同じという考えに基づく日本の良

さであり、アメリカとは明らかに違います。また、アメリカの文化人類学者であるルース・ベネディクトは、欧米は内面的な罪の自覚に基づいて行動を律する「罪の文化」、日本は他者からの非難を恐れて自らの行動を律する「恥の文化」と類型し、後者はこれまで低く見られがちでしたが、決してそんなことはない。実際に、今回のコロナ禍において、日本人は法律で縛らずとも、皆がマスクをして行動を自粛するなど、欧米以上に効果をあげています。この1年、政府の対応が批判されることもありましたが、初めての経験です。から率直に謝って変えればいいんです。未知のことに對して誤りを恐れず実行して、誤りから学ぶことが最も大切です。

『災い転じて福となす』という考えに立つべきだと思います。

進藤 あまり悲観的に考えてはいけません。誤りから学ぶという意味で、コロナ禍の経済対策として、

1日でも早く全国民に行き渡るようにした特別定額給付金は、12兆円のうち少なからぬ金額がそのまま銀行預金となっているとも言われています。財政の視点から言えば、本当に必要な人に対しては十分に給付して、余裕のある人は我慢する。そして、配られたお金が実際に消費されて有効需要になるという、政策的に合理的な対策を考えるべきだったと思います。

橋本 私は一貫して1人一律10万円に反対しました。スピードを前提にするのであれば、申請できる所得基準を決めて3倍の額を迅速に給付し、所得基準以上の申請者がいた場合は、あとで返納してもらえばいいと思うんです。

進藤 一方、世界に目を向けると、昨秋のアメリカ大統領選で顕著に見られたような分断、特に世界的な分断を懸念しています。グローバリズムの浸透による所得格差の拡大を含めて、大変難し

四半世紀にわたり書き綴った書評が収められた
2冊



『二回半』読む—書評の仕事 1995-2011



『虚心に読む—書評の仕事 2011-2020』

い時代に入ってきていると感じます。橋本さんはどのように捉えていらっしゃいますか。

橋本 本来、分断をつなぎ合わせるべき政治が、格差を縮めるところか分断を加速させている。移民問題を見ても、ある意味での弱者を受け入れる包容力がかつてのアメリカにはあったはずで。翻って日本の政治を見ると、日本の中間所得者層が多かった時代は政治も安定していましたが、今は中間層が減って貧富の格差が広がっています。弱者であることを逆手に取って働かないのは論外ですが、その見極めをきちんとした上で、格差を縮める施策に心して取り組んでほしいと思います。

進藤 昨年9月に発足した菅義偉政権については、どう見ていらっしゃいますか。

橋本 40年以上の政治記者経験を通してこういうタイプの内閣は初めてです。かつて総理大臣になる人は大きなビジョンがありました。例えば、田中角栄の「日本列島改造論」、大平正芳の「田園都市国家構想」、中曽根康弘の「戦後政治の総決算」、安倍晋三の「戦後レジームからの脱却」などです。菅総理は携帯電話料金の引き下げ、デジタル庁の設置など、徹底して個別具体的な各論主義ですね。コロナ禍の非常時対応という特殊性はありますが、生活者目線で次々に政策を打つ。このような政権はありませんでした。

資本主義の大転換期。 日本産業界の課題

進藤 次に、日本産業界の今後について伺いたいと思います。個人的に言うと、これまでは新自由主義(※1)のもと、経済理論で言えばマネタリズム(※2)とグローバルリズムに乗って、アメリカと同じ考え方のもとにやってきたわけですが、結局資本主義の今のあり方がやや行き詰まって、分断や格差拡大などさまざまな矛盾を引き起こし、大転換期

にきています。今回、経団連が出した新成長戦略でも同様の分析をしており、産業界は多種多様のステークホルダーを考えた日本的なサステナブルな資本主義に移行していくべきと言っている。これはいいことだと思っています。ただ企業経営者にとっては、その効果を期待しながらも、今後、世界の政治経済の構造がどのようになっていくのが最も大きな懸念材料です。これは産業界の共通認識ですね。

橋本 私たちの置かれている状況を歴史的に捉え、理解する必要があります。18世紀半ばから始まった産業革命後に資本主義的生産様式が定着し、貧富の差が広がるなかでカー・マルクスとフリードリッヒ・エンゲルスの『共産党宣言』が書かれた。そして第二次世界大戦後の共産主義と資本主義の対立構造を経て最終的に資本主義が勝利しますが、その後のニューオーダーがなく、逆に暴力的な資本主義がはびこってしまった。そうした時代の流れを踏まえて、今行き詰まり状態にある資本主義を今後どうしていくのか。その認識を今こそG7首脳会議を基軸に世界で議論して共有する必要があります。大切なのは国際協力・協調で、自国だけが良ければいいというわけにはいきません。

進藤 また、菅総理が所信表明演説で、「2050年までに温室効果ガスの排出量を実質ゼロにする」と発表したなかで、産業界はその実現のために相当なコストをかけて技術開発を進めなければならない。転換に必要なイノベーション、インフラ建設、そしてそれに伴うコスト増などに対して、アメリカは今後4年間で約200兆円、EUでは約90兆円の国費を投入するとしています。日本も大規模な国費投入やコストの社会的負担を考えながら、非連続的なイノベーションに官民一体となって取り組む必要があると思います。

鉄鋼業で言うと、鉄鋼製品は原料の鉄鉱石から、コークスで酸素を取り除き還元する際にCO₂を排出します。現在、CO₂の排出を抑えるため、水素で鉄鉱石を還元する

※1 新自由主義…国家による福祉・公共サービスの縮小(小さな政府、民営化)と、大幅な規制緩和、市場原理主義の重視を特徴とする経済思想。

※2 マネタリズム…貨幣供給量(マネー・サプライ)の制御を重視する経済政策。



◎ 国立研究開発法人 新エネルギー・産業技術総合開発機構 (NEDO)

左からCOURSE50の試験高炉とCO₂分離・回収装置(日本製鉄東日本製鉄所君津地区構内)

「環境調和型プロセス技術の開発(COURSE50)」をはじめ、大変ハードルの高い技術開発を進めています。こうした技術開発に加えて、巨額の費用が必要な水素インフラの整備などにも必要です。また、すべての生産活動に不可欠な電力のあり方についても、産業界全体でさらに議論を深めていかねばなりません。

橋本 哲学者・科学者であるアメリカのトーマス・クーンは、社会発展のための科学革命は、あるとき突然変異で生まれることもあると言っています。2050年までの行程の実行とあわせて、別の新しい発想も必要なのかもしれません。オール・オア・ナッシング、リスクゼロの観念では、何もやるな、何もできませんということになる。今のコロナ対策もゼロリスクではできませんし、原発の制御については歳月を経て格段に技術が発展している。そうした発展プロセスのなかで考える視点が大切です。

進藤 いろいろな方々と地球温暖化問題の議論をすると、時々、1かゼロ、正か邪かという正義論になってしまうことがあります。そうではなくて現実の人々が生活していく上では、多様な技術の発展過程でトランジション、すなわちその間をつなぐ戦略を持って柔軟に着地点を探していくという発想も必要ですね。

技術力と実績に誇りを持ち 難局に立ち向かう

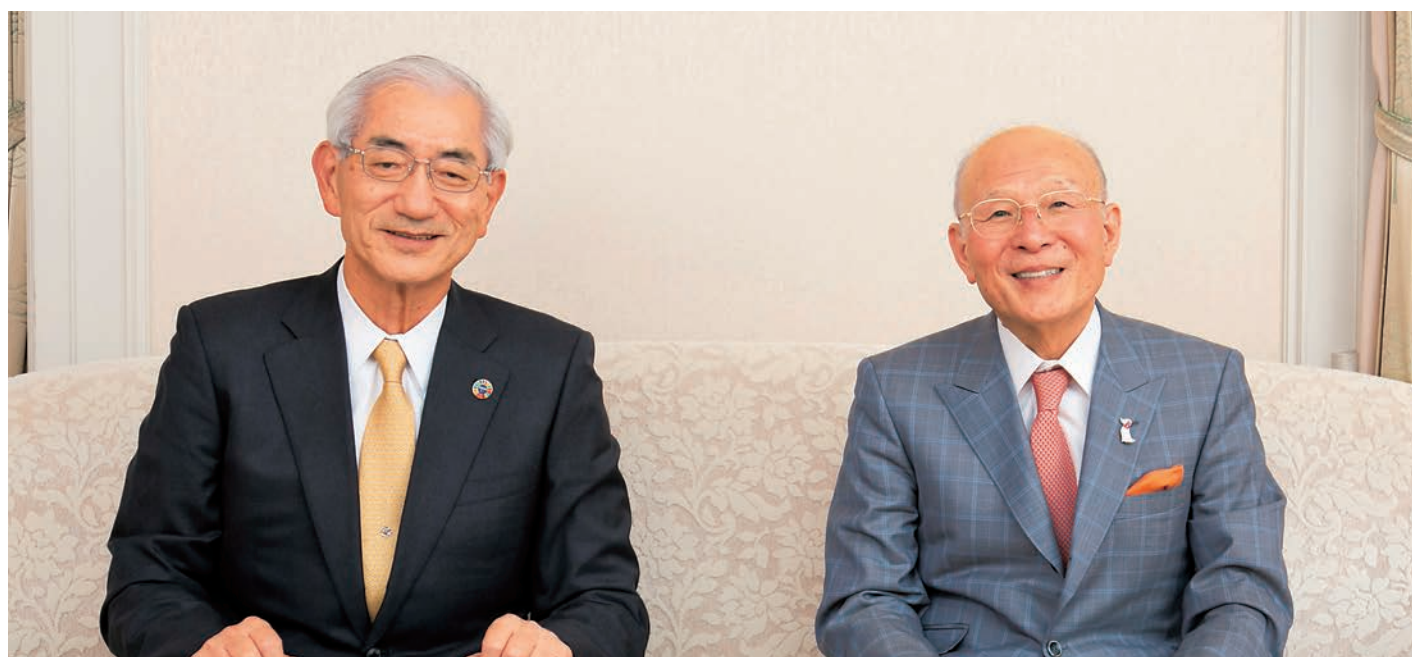
進藤 一方、世界鉄鋼業の情勢を見ると、現在中国が日本の約10倍の粗鋼生産量を誇る国になりました。1978年の来日時に君津製鉄所を視察された当時の中国最高指導者・鄧小平氏から「これと同じような製鉄所を上海につくってほしい」と言われ、その後日本製鉄は多くの建設協力・技術協力を行ってきましたが、40年を経た今、規模を拡大したその中国鉄鋼業と、いかに競争していくかという厳しい局面にあ

ります。日本鉄鋼業として企業の経営統合などを経て、生産構造の合理化を果敢に進めてきましたが、さらに努力しているところです。

技術的に見ると、日本は電気自動車のモーターに使われる高品質の電磁鋼板をはじめとする高機能鋼材などに品質優位性がある。日本の鉄鋼業は需要家である自動車産業や電機産業の厳しい品質要求に応え続けてきた実績・強みがあります。今後も産業間連携のなかで積極的に技術開発を進めて品質競争力に磨きをかけていきます。最後に、日々頑張っている日本製鉄グループの社員にエールをいただきたいと思います。

橋本 技術に特化して製品技術力だけは絶対には負けない。生産量では負けてもそれを支えるのは日本の技術だという領域をいかにつくっていくかですね。時代とともに「鉄は国家なり」という産業構造ではなくなっても、日本製鉄にはそういう意識と、現在の社会基盤を自分たちが支えている誇りを持って取り組んでいただきたいと思います。

進藤 ありがとうございます。歴史的に見てヨーロッパを発祥地とする近代鉄鋼業が、欧米で発展して日本に入り、我々日本鉄鋼業からの技術移転を経て、中国や韓国など東アジアに定着したわけです。このプロセスを推進してきたことが日本鉄鋼業の歴史的役割でもあったと自負しています。そういう観点からも日本製鉄は誇りを持って今後も挑戦し続けていきます。本日は大変幅広いお話と、温かいエールをいただきありがとうございました。



(この対談は、2020年11月12日に日本製鉄南平台公邸で開催されました)